



不條之白句
全



史雜補ハそのるる人々の所著
も其の著るは^{江戸}都
都の著るは^{京都}都
貞徳の著るは^{京都}都
世に^{京都}都著るは
よ^{京都}都著るは
の著るは^{京都}都著るは
か^{京都}都著るは

埴くらゝいふ極乃むとわの他さしよつこ
ちふらういふ極乃むとわの他さしよつこ
正神さふむと貞徳流すよと云あふ
傳字ふも信やうわうそわふせし身
よあま師門にも接うは聴く傳字系
多に集ふらるるゆゑあつ勢もれ勢も
いそし物志りのあよこもめあふは
わふとらうも勢も出さ京田舎より

敷向付ふと集えくは書といれ
と多ふ集ふ事よわ第一句とら物志
とらふ集ふ事よわ第一句とら物志
母同ふ事よわとらふ集の極さこれ
とらふ集ふ事よわ第一句とら物志
多の集ふ事よわとらふ集の極さこれ
とらふ集ふ事よわ第一句とら物志
とらふ集ふ事よわとらふ集の極さこれ
とらふ集ふ事よわ第一句とら物志
とらふ集ふ事よわとらふ集の極さこれ
とらふ集ふ事よわ第一句とら物志

集よむる後古今古乃玉の集も世人
わかむるもよむるも作者の粉骨も
伊つらつたよるのりかへきそとて玉の白
もらふの海一りり美くしらら果ゆらぬ
今我とくめくららるる事よとあけこ
老師のまらりか免給の一年あれ白
とぞいくなむりや一葉肉たらの白を
古集よむるも書ねむらあひらそとて人子



この成然とあせ友一りかみ勢す
くの愛むるもあまらぬ一り
作まらるる事よむらあひらそとて
おらあふ事よむらあひらそとて古集
一りり美くしらら果ゆらぬ
事よむらあひらそとて玉の白
あそむるもよむるも作者の粉骨も
あむららるる事よむらあひらそとて

蕙一たまふゆ作りりりあはれまゆの隠し
百も一は名付てま物あし

予阿房文二天仲春の書流

国生雪月花集

細川忠兼

うやまきまゝいあくと花乃面

建本回守武

花よりと鼻しふまけお白ひり那

山田正盛

咲ぬまや赤嫩乃たより花若浪

佐白正次

火ととも活舞吹けと風来波の風

野口正圃

漆あて皆花ぬらそよ野山

野口正吉

羞ふに名母もや人の縁り花

弘永

名系人まき市川あまや花若浪

章和

芳野山は心むき花乃知りし
垣内安云

春風をいかに花乃知るるべし

墨崎重紀

花見めは下戸ありぬらう男心

伊田可奇

柳の舟屋に眺めをせうの風

黒田正平



春より後とて花乃眺めやありて秋

成安法師

今日の花を志すははははははは

可基

花は心むき花乃知るるべし

任田正信

春乃風行色うむき

成田正信

花王御坊等御宇に花乃部式

馬淵宗伴

吹おの系花や去風切利 天

良徳

想ね鳥ハ花若錦 一と去る御

去霄

河の菱神やあつゝ雲のたれは流

速宅

貞女もや月と花少は少くも流

鶯

池田正武

鶯乃声ハは菱経乃花中式

次良

藤の肉若くもや去風切利

毎夜速宅

此竹を花乃雪の祿くく那

為田正吉

鶯乃平ハきけあねん年式

白田正一

よむくく雪露や花若竹

重方

よふもあけりるくくえ乃雪此露

正徳

奈まねんは雪もやは美少京も紫

夕露

羨ふくも雪露もや平ハ梅く

女房

梅毒ふる雪露もやさかこ雪

一原友我

雪乃つふじやみくこの梅く梅都

蛙

本村重順

そらあきうら平下う海もやひくうの家

定重

賀乃平下う岩井のまふた平を蛙

山村季吟

山の井乃くふた声や平下乃母

獨下

かあはく乃下此蛙やまる合衆

伊友貞祇

能周り平下てうと系河まのくふ

未得

一可もあそぬ蛙う子たう那

政良

うらうらういあ母はまひての蛙は

橋本每道

西比とうこうしん平やちるは桂

田寺久頼

浪ゆる桂乃ちるを友とて

実為跡

平城の丸をふく海を桂の形

郭

の智日向守

卯月暮る祢少のまけや郭

道持斬貞徳

賣のりいふに言祢老の郭

夕朝静真

叶はさふ恋とほあふや郭

行山秋月

行由とくも身はわたり郭

夢の友

のたまふにききよあはれし時乃る

其房 先貞書

たのむふとく笑といふり胡とん

浅野重平

ありと笑ふとくひつるをひひる

松江重頼

まのりふりてまふたふたけ郭へ

如友

結事あはれそあはれとまの色の何ぞ

山内玄心

とのる者あはれそあはれ郭へ

蟬

如貞

あはれそあはれとまのや蟬乃の何ぞ

菅野茂下

たまきつらうく青や根中せと歌年

言稿正信

夏ふじさふ銀ハ何面そ蝉乃年

光る

夜着く亭し心いませとし柳水

長野業秀

青紫つよひの念きハ蝉おもしろ小枝水

定房

蝉乃年や東陰乃物のおも集

感庸

あふ志着つてあけく蝉乃心

友幸惠依

とらう名のけいともはの系蝉乃年

児玉貞利

石川の青や自然と蝉しおも寄

徳定

桂輝や何處も同き平一合

月

名月山登の月とらふまじと

一葉軒貞室

花あつともふやゆさうら山登の月

正長

心引二張若らやあ若月

三

り年のあそきてあつや涼平の月

正佐

西武

芋と色子とうめとこよみの月若水

重信

じうと登はあふああけそと釣月

沈子

あふ月乃菊うらととの苑とこれ

高瀬梅盛

よ免やよめ獲之の糸いりも月見

青地可頼

朝之由乃名ふ志系月乃わさくれ

仲鶴貞直

水は浮じ身や方角乃うのりま

昌意

志はくいらがとそたをふ小燈月

一升童光

一法かそくもよらそや三ヶの月真

玄札

三果も二階もそくそ月見くれ

可理

二千里北がうらよ入あやらる月秋

松書一治

月見あは依船等の舟橋板戸くれ

善可

月乃の系天若戸小續もりか

重政

徳るひと海山若戸系若丹小

重吉

中そり六のりくつありとて今若存

政通

多に知く若戸のそそり月夜

定時

留乃と若めらふ家や月も車一私

松村幸増

天乃をまらふらうりて今乃月

雷

体甫

はましく銭家とて丹波乃粉高小

賀鴻書函

海客也一夫去河の浪若義

蘇醒安稿

玉冬のいつとも書乃津守のれ

元正

海客ハ銀の比うやうま心

長者

津出家乃肩の妙も也類乃言

十一

渡邊是也

竹葉身と腸と叫びるゝ書式

三遊

深祿大かゝりゝ書ハ地白那

玄弘和為

書とらゝ書ハ花のあゝゝ

楚仙

書方ハ書あけゝゝゝや風密

一正

有り流し是也よまをう竹乃香
昔前も昔改

ゆふく流しま仔細し新の香
空存

白鷺や空ふきくれわるる空宿
重勝

柿乃木ふ流ふつゝ香や筆書水

奥西友三

空を交そ母ふとゆふ流し香とん家
東谷とん香

ゆふ流しと香もや白うぶ家
梶山保友

待作りくゝる家や東故り竹の香
一滴

白鷺も香もふくはくはくはの流

道案

よき目よは志堅うく徳や木の香

書やあんなにまよひやうんこ白猫

右にやうこあまの湯方乃活

作とせ

源氏物語古今集以下之類書之傳意

九條の禪園之御的流より

儒書志明美流の的流より

教之徳方相三下之傳受秘事云

細川也兼らゝの流也

徳徳中興用山儒教の長より

貞徳居士

末く徳の乃まよとせゆふ人正徳の風流

とせひく一徳の金云ふ白連教めまよとせ

とこのむきもあふ角乃るまに矢あはに傍を
借。借は借。能は能。能は能。能は能。能は能。
くの事さうも能くさうも能くさうも能く
は能くさうも能くさうも能くさうも能く
し能くさうも能くさうも能くさうも能く
いつと能くさうも能くさうも能くさうも能く
ら能くさうも能くさうも能くさうも能く
と能くさうも能くさうも能くさうも能く

貞徳在母也

立圃

貞徳在母の也。母は母。母は母。母は母。
けは乃風俗のいふ能くさうも能くさうも能く
能くさうも能くさうも能くさうも能く
ふも能くさうも能くさうも能くさうも能く
やと能くさうも能くさうも能くさうも能く
うも能くさうも能くさうも能くさうも能く
ふ能くさうも能くさうも能くさうも能く
能くさうも能くさうも能くさうも能く
能くさうも能くさうも能くさうも能く

金とせはば有袴してある一

彩雲乃執やうららの世のうめ 立園

又まの目揚せらるる句

の書みし色彩系観音と云あるよ

尺袖お糸あも地さの花は心く

千里を一歩よりせむとせはる可るよこの

一と白うとれもひよりの海一

貞徳中世

重頼

我の流と立られしあまのころの句をたす

よ身一貞徳乃風とわゆる句をきんとて

りまらるる句は二の世のうめとて

又ははせらるる句は二の世のうめとて

貞徳とて世の世よ出りて我流と

立は仁じし所よりあつらひわらうは

乃小の書精びてあまも教養い

たされ地をたらしよゆるは世にあり

てかめしあまの世の世にあり

あは古きしよたてひの敷のふひらくはにり
て作さしあひけ敷のよそあるて

来子秋やうまそゆまろ砂糖瓜 重頼

芳らとは尻の末もと物やまき堂

け二句と古きしよたてひの敷のふひらくはにり
吾会よゆまろ敷のよそあるて
まき堂や重頼の末もと物やまき堂
足くこのけはは福乃中のまき堂よ重頼
紫とらうまき敷のよそあるてけしたのもまき堂



けしきしよたて

屋敷表よたてしよたてのけしき

らうまき敷のよそあるてけしたのもまき堂

あは古きしよたて

書物はうまき敷のよそあるてけしたのもまき堂

右の句は皆福乃まき敷のよそあるてけしたのもまき堂
けしきよ朝書心とよまき敷のよそあるてけしたのもまき堂
てまき敷のよそあるてけしたのもまき堂
まき敷のよそあるてけしたのもまき堂

くはくを志すまわれあかしくん

貞徳御覽
今徳
貞徳御覽
也壯年乃はらと師門よ懸ひて務
骨とつとふまは貞徳ととん
と徳とて一志の能書とゆつとを毎
乃のわの志を志し一志の能書とゆつとを毎
れきふ叔方の神ひじしとらと師門よ懸
用あ師乃とつとふまは貞徳ととん

たむら付らこおまそあひ入らり
ともかきまそと師門よ懸ひて務
りか一口とふまは貞徳ととん

是年北河内國入ふらの宮方年

貞徳御覽
貞徳御覽の日記
人也
前よりてんひま終る師門よ懸

乃田一白乃美あ一白乃美乃
くしむらふ徳とすく一白乃美乃
あ家一白乃美あ一白乃美乃
ああ乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃
く付乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃
そ奈と珍乃乃乃乃乃乃乃乃
のあ一白乃美乃乃乃乃乃乃

教声や美も録一白乃美
母乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

貞室

貞徳を世に記すは乃乃乃乃
け仁乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃
一乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃
白乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃
あ乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃
あ也乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃
乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃
乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃
乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃
乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

とふは仁とて先は口よりしく後たは心
終と為ると思ひらばそれこそ我ふこと
一文お初る志はあはれなりとのそ
と学やうはゆへに三年のことも
と名別盡ひ一白紙とらふは思ふ
乃耳あまをうへありを自らあ
あさうして先師の内の面影も
辨務りゆふ家そやけ仁神は
女六年一一事を貞徳の心よそ
心

け道乃松骨とあきれは色は師も
まをりしとよみしを翹く
用は仁も能きこの傳交と
秘の辨は傳へてあまの
力會は貞徳とあはれは
はうのこは後兄中子あ
きて後乃世の純授と
書はく

天あくらひはかじらや秋乃月

御一志おし乃花かみり又露 貞室
骨のしたふそわらふあまのいづて 西長
け美を百韻ありきまの七人ありけお貞徳
心の中子半産された或い早下りて
悲事ともおし世人あま事なまされけら
う初とふれよりの貞室門人一人あま
き心とおあまはあま書紀あり

貞室の御也
季吟

けにの年のびらりしけらる徳心
とあ一室の門よあそりる貞室を
ま心と一室一貞徳世の門も徳
侍り多徳とれまもおく徳
仁也朝夕お粉骨と妻一貞徳貞室の流
と家子とれふらあるも教成つてこれ作
とたかこふあまの意用と家室もけはは組
乃家徳并よ先師にりの傳文乃徳の
も徳とてゆつびとあし多まは今とて

貞室日記
安靜

は仁と名年乃びし一ありはま
よ心と一ありはまの出入きり貞
徳と世の心切りの會とを一徳
少句もも他とももさ徳死
出ふ海乃りめ一貞室玉海集あまふ
わろ貞徳とく長熟の句と教多人
集を母とまると心室まふく句と味
して教人の内才九句入集せらるると
恨よあひ出のして今かく我流の點か



と成出されうあくと今年の歳出よ
笑佛とてはあまのあまはあ
とふると志らまると年月と終り元日
の句もはらうとまふとまふはあひらや
うそは徳又のあまのやうらや

貞室日記
可頼

は仁今よまふの出入しては道とと
けまふ貞徳在世の内あま切徳の
一室と傳あて今ももをさし今

為用より御神を徳家乃風家よまたり
と作らるる

^{室戸}正信
亦ふおか—まか家の—御してを流
と字貞徳—も出入せ—ん也為用を
可頼—の—わらう—す—ま—り

^日惠依
お—同—為用より—丁—宣—らる—御徳—御
お—と—御徳—らる—ら—も—沙—は—あ—

貞家—の—も—め—ら—る—御—門—に—も—
七年—も—ひ—い—出入—を—行—信—也—貞
徳—の—命—も—お—り—を—也—也—
—と—御—の—御—は—は—の—傳
—の—も—あ—り—御—を—の—御—
—と—也—は—は—の—ま—
—の—も—も—貞—徳—
—の—

右集所之家之風神志心
之學部部一志心之為人書
新志也空賢

